

いまこそ道義と精神の開発を

すべての人すべての国の新しい役割

第六回 MRA国際会議開催

6/4～12

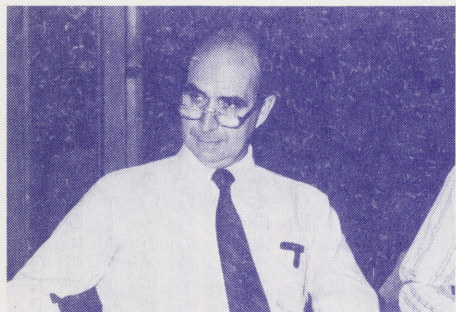
今年も六月四日より六日にかけては小田原で、六月十日には大阪に場所を移し、第六回MRA国際会議が開催されました。

メインテーマに“いまこそ道義と精神の開発を——すべての人、すべての国の新しい役割”を掲げ、国内外より多数の出席者を得て活発な意見交換と交流がなされました。

今年の海外代表は、英国よりの九人をはじめ、七ヶ国二十二名でした。又、さる四月に来日されたジェフリー・フレイグ御夫妻も準備の段階より参加され、日本での初仕事となりました。

会議は全体会議、分科会を中心にフランク・ブックマンの夕べ、文化の夕べなどを織りまぜ進行しました。小田原会議の翌日には、海外代表は日本的情緒の溢れる東芝の保養所に招かれ東芝労使の代表の方々との交流の機会を得ました。続いて関西でも関西連や大阪青年会議所のメンバーとの交歓等々に加えて、奈良訪問など日本文化の一端にも触れてもらいました。その後も国鉄新幹線司令室、日産自動車工場見学、そして政財界その他各界の人々との交流を通し相互理解が更に深められていきました。

今回、初めて参加されたオーストラリアのジャーナリスト、クリス・メイヤー氏に日本の印象や会議で感じたこと、住友美子さんには大阪集会の模様を、そして竹本哲子さんには会議で知り合った一人の韓国人女性との触れ合いを通して考えた、日本と韓国の関係について報告して頂きました。



クリス・メイヤー
(オーストラリア)

ジャーナリスト。過去15年間にわたり、海外、主にアジア諸国で活躍してきた。インドでニュースマガジン“ヒンマット”を創刊、共同編集者として活躍。2人のお嬢さんは共にインドで生まれた。現在オーストラリアのメルボルンに住み、オーストラリアMRAの責任者の1人である。

私達に今必要なもの
それはここからの回路

MRA国際会議に参加して

◇二十五年振りの日本

私は今年の六月、二十五年ぶりに日本を訪れました。桜の季節には遅すぎたものの、数多くの発見に感銘を受けました。殆どの「エイリアン(外国人)」——成田空港の人間管理の標識——のように私も、日本人について無意識のうちに英語圏の月並みな発想に捕らわれていました。例えば、よく日本人を対象にして使われる「仕事中毒」という言葉を思い出し、その患者たちに出会うことを予期していました。(まさにそれはゴルフボールを打つのでさえ、私が後に日産追浜工場で見たブルーバードやレバードを溶接していたロボットのように正確に打つ民族でした)。又、若い世代が伝統や年寄りを受け入れないとか、溶鋼炉のごとく烈しい繁栄を遂げた産業社会のもとで、その「経済発展」のために国民が自然環境を犠牲にしてその代償を支払ったとかいうものでした。

もちろんその気になれば、これらの不幸な例の数々を見つけることは出来たでしょう。

しかし、私はそれよりも驚く程多くの、私に気を使う好意的な人々や一人のオー

日豪の世界に対する責任

ストリア人が何を考えているのか興味を持ち耳を傾けてくれた人々により惹かれたのでした。

私はMRA国際会議に私を招待してくれ、大阪や東京で各界のリーダー達との話し合いや会議の手伝いをしてくれた日本の方々にとっても感謝しています。

オーストラリアと日本は太平洋ばかりでなく偉大な仕事をも共有しています。日本はオーストラリアの八倍の人口を持ち、オーストラリアは日本の二十倍の土地を持っています。

そして、オーストラリアには十分な食料、繊維、鉱物そしてエネルギー資源があり、日本にはその科学技術や生産能力があるのです。

国が富み力をつけるということは、それ相当の責任を負うことだと思えます。もし私達が第三世界の国々が成長し、繁栄するように手助けし協力するといふ責任から顔を背ければ、先進国に対する第三世界の嫉妬はいずれ憎しみに変わるでしょう。歴史は世界の持てる者と持たざる者との分裂が、原子爆弾よりも大きな爆発力を秘めた分裂であることを示すことでしょ。

一九五〇年に、私はスイスのローにあるマウンテンハウス(MRAの国際会議場)にいました。

その時、七六名の日本人代表団がMRAの世界大会に到着したのをとても良く覚えていました。

彼らは戦後の混乱した時期に、西側をこうした目的で訪ずれることの出来た、数少ないグループの一つだったのです。

私は若いオーストラリアのジャーナリストとして、その中にいた広島と長崎の両市長に取材をしました。日本人と会うのは初めてのことでした。そこで私は一九四五年に日本人が体験した暗黒の日々を理解し始めたのです。

私はオーストラリアのような国々が、一九三〇年代に日本に対して心を閉ざし(そして日本への貿易も閉ざしたのですが)、日本が直面した経済的、社会的な圧力を柔らげる助けをしなかったことを恥ずかしく思いました。

それ以後、私は日本を四度訪れました。そして色々な国々で日本人の人々と共に働いてきました。また、メルボルンの私の家に日

本人を招待し、友情や共通の努力というものを分け合ってきました。

私は、ワシントンや他国の、日本の防衛力拡大を求める要求に日本が乗り気でないことを理解しています。米国に百八十億、E E C (欧州経済共同体) に百四十億近い貿易黒字に対して、西側の貿易相手国は日本がもう少し輸出を抑えるようにと要求していますが、それに対し悩み苦しんでいる日本を、私は十分に評価しています。(どうして、この貧しい世界で能率と生産力が歓迎されないなんてことがあるのでしょうか)、しかしながら同時に、日本はオーストラリアと同様に、より世界の指導的立場と責任を担うことを余儀なくされてきています。日本はその役割を受け入れ理解する必要があります。

私が会った国會議員や経済学者を含む多くの日本人は、今後日本の役割は発展途上国へのより大きな援助にあるのではないかという意見を強調しました。

日本は一九八一年にGNPの約〇・二八兆を援助に当てたと聞いています。オーストラリアは自国のその〇・五兆を費やしています。どちらの数字も自慢出来るものではありません。

もし日本がそのような発展途上国への開発援助にもっと本気で取り組みれば、日本の果たした経済奇跡の成果はもっと早く受け入れられるはずだし、日本人のエネルギーや生産力に対する他国の恐れも静まると私は思います。

貿易障壁によって日本の輸出に對抗しようとしている国々も、それによって新しいパートナーシップへの展望というものを見つけられるかも知れません。日本、米国、E E Cそしてオーストラリアのパートナーシップによって、世界には必要を満たす物は十分にあるが、欲望を満たす余裕はないという決意が世界に示されなければなりません。

◇良き種に 豊かな収穫

MRAは一九四五年以後(戦後)、日本が国際社会に復帰する手助けをしました。これは歴史



▶オーストラリアからのもう一人の参加者
トム・ユレーン氏



◀クリス・メイヤー、北田勇両氏の司会による分科会

私達に今、こころの回路を

の事実です。MRA活動は韓国、フィリピンそしてオーストラリアといった国々と日本の間にかげ橋を築きました。

最近、一九五〇年のコーの世界大会で日本人代表団が持ってきた、故吉田茂首相のメッセージを読む機会がありました。

「新しい憲法で戦争を放棄した日本人の為に、MRAは文化的で平和な国の基礎を築くだろう。私はこの日本代表団がMRAの良き種を日本に持ち帰ることを確信している。そして、その種は世界中のMRAの友人たちの協力を得て、日本で素晴らしい収穫を生むだろう。」

それからたった五年の後に、偉大な国鉄総裁の一人である十河総裁は言いました。

「我々は既に経済五カ年計画の目的の殆んどを、この二年で達成した。それはMRAで訓練を受けた産業界の人々の動きに依るところと考えられる。」

我々の偉大な寺院が建て直しを必要とした時期があったが、献身的な聖職者達はその土台となる正しい石を見つけるまで北

から南の島々まで捜し求めた。

我々は戦後、国を建て直す事を願ひ、その為の正しい石を捜し、そしてMRAにそれを見つけたのだ。」

良き種に豊かな収穫、そして頑丈な土台に必要な正しい石を喻えてMRAを語りました。

日本は産業界や社会に於ける色々な分野でMRA精神を取り入れることを学びました。

この精神こそが、日本の最も重要な輸出品の一つになりうるのではないでしょうか。

日本製のあの小さな電子回路は、巨大で複雑な産業のプロセスをより活動的なものにしてきました。

一人一人が心の声から得ることの出来るガイダンス、そして四つの絶対標準に従って生きる決意こそ「こころの回路」になりえるのです。今、死にむかって自らを投げだそうとしているかのように思えるこの世界において最後のそして偉大な変革を求めようとするならば、私達一人一人にこの「こころの回路」が必要であると確信します。

必要であると確信します。

大阪集会

住友美子

爽やかな初夏の一週間を本年も亦三大陸八カ国から二十名の方々を関西にお迎えし、共に過ごせました尊い日々を心から感謝致しております。誰方もが宝石のようにきらめく質の高い人間性を持たれ、それぞれ多くの自己犠牲の上で来日されました。

サンケイ、日経新聞社訪問、松下電器、朝日テレビ見学、関西経済連合会午餐会、大阪青年会議所午餐会、関西集会、アジア協会との懇談会、古都奈良唐招提寺、薬師寺、大仏、依水園見学、花外楼晚餐会、歌舞伎見学、鈴木剛氏茶会、最後の懇話会等の日程でございました。

海外チームの皆様がそれぞれの持味を発揮して、随所に人々に最高の精神を与えて下さった事が忘れられません。殊に初めてMRAの世界勢力と共に過ごされた韓国、中華民国の若い方々が終にはすっかり溶け込んでチームワークを発揮して下さいました。中国の若い江堤荘氏のこと、中国の若い江堤荘氏の「日本庭園、茶室には人が静かに心の声を聞く環境が随所にある。中国文化が世界一と考えていた傲慢さを詫びる」との言葉に大変心を打たれました。イギ

リスの方々の見事なチームワーク、厳しい環境を乗り越えて持たれた信仰、オーストラリアの方々の目立たないが一人一人への温かい思いやりと親切、インドの方のときすまされた深い叡智、ノルウェーの方の何時も変らぬ人への配慮、韓国の方の喜び、中国婦人の若い人々への心くばり等々毎日毎刻与えられる事が多く胸の膨らむ思いで過りました。

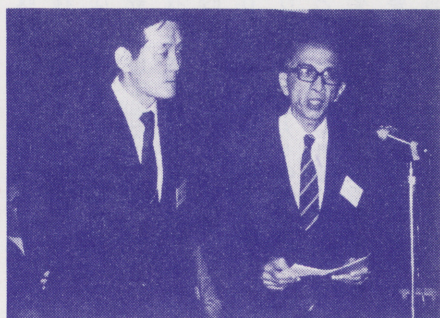
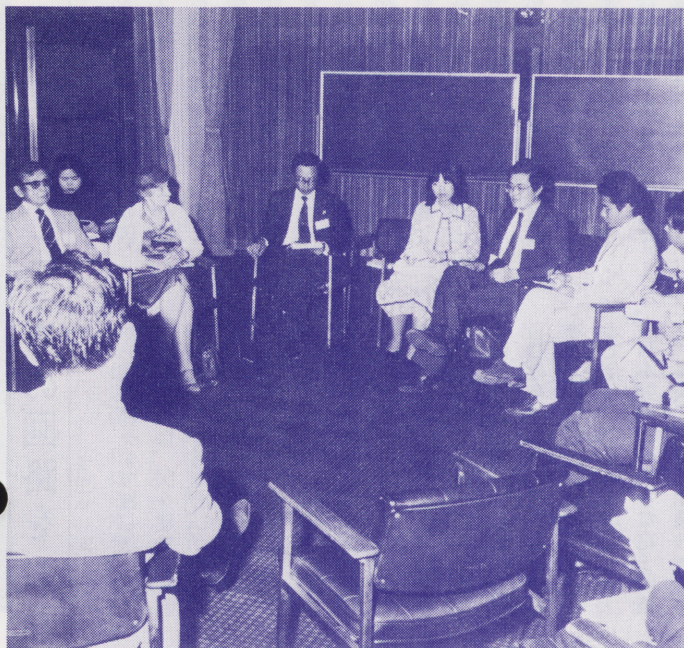
此等の日々が海外の方々とって正しい日本の紹介、日本の歴史文化の深さ、対応の仕方への理解の一端となればと願っております。

私はこの一週間御一諸に過して乍ら多くの示唆を与えられましたが、それぞれの国の実情、世界各国に起こっている動き、必要性を知り日本が今後どの様に具体的に動くべきかを学ばせて頂きました。インドのララ氏が言われたように日本がこの国に何が一番必要なのかを表現出来れば、日本の優れた経済性ばかりでなく優れた倫理性を世界に示す国となり得ましょう。感謝と共に心を一つにして前進したいと存じました。

国際MRA日本協会は、倫理性と調和をもった世界作りのため、世界のMRAチームとの連繋のもと諸般の活動を行っております。毎年開催される国際MRA会議もその一環であり相互理解と信頼の絆は年々強まっております。他にも人材育成のための研修生の海外派遣、研究会、講演会の開催等々、日本人の「心の開国」を推し進めるために活動しております。ぜひこの活動にお加わり下さい。御入会下さった方にはニュース初め各種会合の御案内をさせていただきます。

御案内

- 一、会費
 - 個人(特別) 月額一口 一〇〇〇〇円
 - 個人一口 五〇〇〇円
 - 法人一口 五〇〇〇〇円
 - (共に年額)
- 一、払込先
 - 第一勧業銀行代々木支店 (普) 一六三一〇一四 三三三六
 - 住友銀行新宿西口支店 (普) 二五九一四一八三 七九
 - 富士銀行動坂支店 (普) 八六一一二二〇〇
 - 国際MRA日本協会宛



▲分科会「家庭生活における道義と精神の開發とは」より

◀インドのジャーナリスト
ルーシー・ララ氏

◀全体会議でスピーチする
レス・デニソン氏(英国)

▼会議に参加した日本、韓国、中華民国の若者たち

アルバム

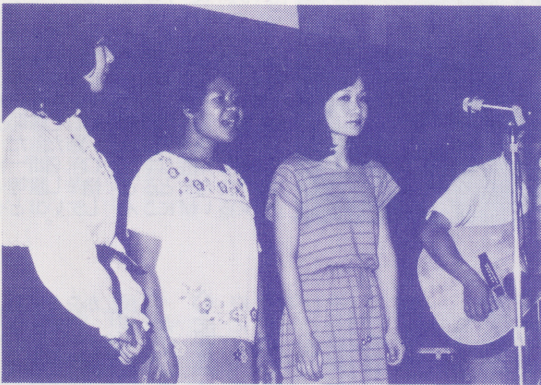
82 6/4～12

第六回 MRA国際会議より





▲会議の合い間に話し合う国鉄OBと労使双方よりの参加者

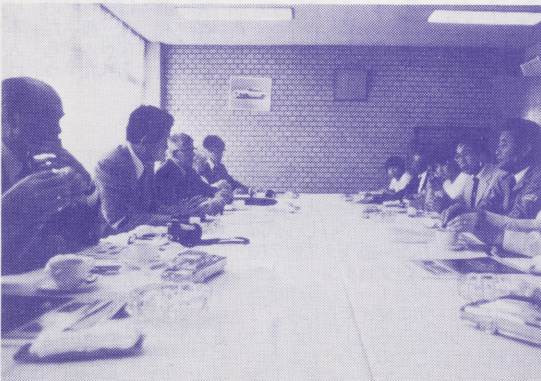


▲ダイネシ・ワシさん(バブアニューギニア)の唄とおどり—文化の夕べより



▲食事も大切な交流の時間

▼日産自動車追浜工場見学



▼韓国代表の一人、韓正教女史



韓国の友



竹本哲子

初めて知った日本と韓国の歴史的関係

私は政治的なことが嫌いであって例えば韓国や沖縄の問題もその話をきいた時は、何とかしなければと思うのだがすぐ忘れてしまう。まことに頼りない人間である。

この間テレビで蘇我の入鹿のことを聞いた時（日本史探訪）、蘇我の稲目（入鹿の祖先）は韓の帰化人で優秀な技術指導者か何かで日本に渡来し、その娘は二人とも皇后になり、聖徳太子もその孫か何かであることを初めて知った。そうしてみると日本の天皇家の血の中には半分は韓国の血が入っていることになる。又当時の高級官僚の三分の一が韓国からの帰化人であるとも言っていた。

日本人は意外と日本の歴史を知らないのである。最近日本が先進国の仲間に入り、朝鮮を侵

略して属国のようにしていたために、日本人の支配下では朝鮮の頭の良い人達は退けられ、よい地位にもつげず、その才能を發揮出来ずにいたという事実もある。

考えてみれば韓国人の血は日本人の血の中に半分は入っている。だから歌も物語もよく似ている。その似ている点が日本人にはカチンと来たのではないだろうか。しかも彼等は長い間異民族に支配されたり、侵略されたりしてユダヤと同じく悲劇的な、非運の民族である。だから苦勞して育った人の持っている長所も欠点も持っている。日本人のように島国でぬくぬくと育った民族にはそれが気にさわったのであろう。

主人の五高時代にも秀さんという大変優秀な同級生がいたが、

頭の古い体操の教師などは「朝鮮に負けては日本の恥だ」等というような言い方をしたらしい。秀さんはどんなに辛い、口惜しい思いをしたことだろう。どんなに優秀でも日本の官吏などになつて成功することの出来ない時代であったから、彼は東大の文科を出て、故郷へ帰って独立運動の闘士になつたそうである。彼は朝鮮の独立まで生きていたのかどうか、多分生きていなかったのではないだろうか。私は秀さんの話しを心に痛みを持つことなくきくことが出来ない。

それから健体天皇の話も聞いた。銅像にみる健体天皇はいかにも顔の大きい韓国系の顔である。この天皇は福井の方の豪族であったというが、その父君の墓から出土品なども韓国の王族の出土品と同じようであり、韓文化の影響を色よく受けているという。健体天皇は神武天皇そのものではないかという説もあるそうだし、健体天皇が韓国の血を受けた人であるとすれば、日本人の考えていた神武天皇とは大変な違いで、それまでの南方系、熊曾系、アイヌ系等の種々の王にかわつて、韓国系の天皇が日本を統一したのであり、

身分の高い支配階級はみな韓国系ということになる。日本人はそのことを知っているのだろうか。大国王命が韓国から渡つた民族らしいということは昔ならつたが、あまりにも経済発展をして思い上つた日本人、昭和政府によって歴史を作りかえられた日本人はそのことをタブーとして語らず、民衆は知らされぬまま今まで来たのだろうか。

知ることは愛すること

私は小田原で開かれたMRA国際会議に参加した最初の日の食事の時韓国の女性と隣り合わせた。私はこの蘇我氏の話しを彼女にしたかったが、彼女は日本語がよくわからず、私は英語がよくわからないので、ちょっと柴田さんに通訳してもらった程度であった。

次の夜各国の人が民族の歌や踊りを披露する「文化の夕べ」があったが、その時韓国の人達が「統一を望む歌」を歌った。

私はこれに胸をうたれた。歌い終つた時彼女は顔を覆つて泣いた。何という非運の民族だろうか。今は彼等に過ぎ去つた日本へのうらみなど云っているひまはない。不可能にみえる「統

一」の壁をどうして打ちやぶるか、新しい困難に立ち向つていく。

私は翌日廊下で彼女に逢い「元気でしょ、かりやうて下さい」と激励した。「ゆうべの歌には泣かされました」と日本語で云つた。

閉会式のとき、私が早目に帰ろうとして一階に出た時、彼女はエレベーターで上ろうとしていたが、「アー帰るのですか」という。私が何気なしにええというのと「さようなら」と彼女はエレベーターの中で精一杯の感情をこめて手をふつた。

それだけのことだったのに私は彼女の友となつた。韓国に行きたいとは一度も思ったことはなかったが、何とかして彼等の力になりたいと思うようになった。そして「MRAの会に出てよかつたなあ」と思った。「知ることは愛することである」。韓国・ラオス・ベトナム等の人達とじかにふれあい、知り合うことによって、私達は自分達よりも不幸で、しかもそれから立ち上ろうと雄雄しく努力している人達に、同情と尊敬をもって心からの激励を送ることが出来るのである。

テーマ 国際社会における道義と

精神の開発とは

●司会

マイク・スミス

戸川 宏一

●書記

佐藤 哲郎

深沢 英雄

(出席者35名)

◇チェンジとは？

司会——ブックマンの言葉に「インプレッションをエクスプレッションしなければディプレッション」というのがあります。どなたでも会議の印象をどうぞ。N・T——チェンジとは何か？。又何故必要なのか。

R・L——心の奥底では誰もが成長したいと思っている。人生とは、届かぬ星にたどりつこうとする努力である。不純潔では叶わぬものになる。現在の位置から離陸しようとするのがチェンジである。しかし多くの人はそれを拒否している。

T・U——チェンジは問題解決の第一歩である。個人がチェ

ンジを体験することによって国このことを考えるという経過をたどる。

N・T——MRAのチェンジは宗教でいうチェンジとどうちがうのか。

R・L——宗教をより広い意味でMRAは包括している。

M・S——MRAを実践することによって宗教をより一層理解することになる。自分はクリ

スチャンだが、MRAを知ってから自分の方向を見つけたと思う。又世界について語る前に、自分自身の不正を正すべきであると気づいた事が、心の中の革命の第一歩であった。

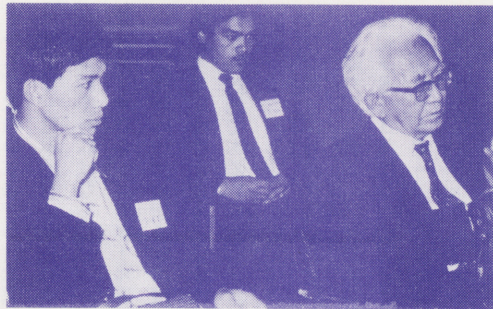
N・T——デル・カーネギーと同じ理論ですか？。

T・U——彼の理論は、人にアプローチする技術、人に好意を持たれる技術を重視するノウハウ的なものだ。MRAでは良識(心の声)を重視する。

T・T——平和、国家という面からMRAの存在価値がある。『新しい役割』というものが、いかに大変かと思う。イデオロ

ギー、宗教が人間にかなりの影響を与えている。何かモラル面での革命が起こり、幸福、平和が得られるように、MRA運動を拡大、強化していかなければならぬ。平和は行動を起こすことから始まる。

K・H——中小企業経営者の集りで、ある仏教徒の方が、仏



教的にいってもMRAは大切であると言われた。チェンジすること、もしくはできる範囲でMRAの基準に従って行動することだ。

M・S——MRAは政治的ではないが、あらゆる政治問題にはモラル的背景がある。インドでは、毎年、「開発に関する会議」

が開かれ、今年は「開発に対する障害」を討議し、汚職とか不正の撤廃について話した。それは結局個人の問題であり、ある人は「国連の円卓で話し合っている問題は円卓に出席している人、一人一人の抱えている問題よりずっと小さなものである」と言った。

T・F——海洋法会議に関係して感じていたことは、チェンジは難しい、しかし、それしかないということだ。第一にナショナルエゴイズムの克服がなされなければ人類の将来は危い。この壁を乗り越えるには一人一人が緊急にチェンジすべきである。

R・L——バランス・オブ・パワーが日本に移りつつある。もはや責任回避はできない。日本は戦禍の悲惨さを知っているから、その力を平和のために使ってほしい。

◇道義と精神の開発はどこから？

T・T——道義と精神の開発と言いますが、それらはどこからでてくるものでしょう。

T・U——体験からです。自分の怠け癖をどこかへ追いやり

ます。心の声を聞くと、あらゆる可能性が開けてきます。

M・U——個人レベルで世の中が良くなるというが、実際の世界のいろいろな動きは組織、企業によって行なわれている。

例えば、日本の東南アジアにおける森林伐採も個人の意志を超えた組織の論理で行なわれており、その結果砂漠化が問題になっている。組織に対するアプローチは？。

R・L——森林伐採は単に日本企業のみでの責任ではなく、当地の政府の問題でもある。

組織へのアプローチでは、ロバート・カーミカエルの例がある。彼は一九三四年よりジュート産業を興し、一九五一年にヨーロッパに協会を設立、会長となった。彼は一九五〇、五一とカルカタに行き、ジュート産

業の中心地であるカルカタの貧困を痛切に感じた。そしてその貧しさに対する責任を感じた。そこで心の声に従い、それによる戦略を打ち出した。まずジュートや麻袋を高値で買うようにと指令した。当初会員達は猛反対したが結局はカーミカエルに会長をやってもらい、彼の提案を受け入れることとなった。

それから十二年かけてジュート協定を成立させ、それは現在FAOの協定モデルとなっている。会長をとうしてMRAを紹介すれば組織も受け入れてくれる。

M・S——ロバート・カミカエルが最初にコーに行ったときMRAの機能を知ろうとした。しかし、そこでは「心の中の声を聞け、それがMRAを知る唯一の道」と言われたにすぎなかった。實際心の声を聞き、ノートに書きとめるというのをしていたれば邪念は取り払われる。それで一人一人が化学反応の媒体のように動くことができる。四つのスタンダードに従って実際に行動してみる。朝の静かな時間を持つことは誰にでもできることだ。できた考えを誰かと分かちあうことが大切。

◇第三の連帯を

K・H——昨日はチェンジについて集中した。変わるという事は蝶の変態のようなもので、人の立場・環境によってそれぞれ段階がある。それぞれの立場でやるのがたくさんある。自分自身が皆と何かをやっている

きながら一歩一歩進むのだ。今必要なのは一人一人の「第三の連帯」である。

T・Y——日本人は個人では常識的な人が多いのだが、組合とか当局になると本音が出ずらい。何が正しいかを考えることによって誰とでも本音で話ができる。個人の常識が全体の意志決定を行ない得る。

K・K——私は主婦。子供がなくて里子をもらった。主人がアジアに関心を持っており、子供と三人でタイに行っていた。その子はずっと兄弟を欲しがっており、主人がボランティアで難民キャンプへ行っていた関係で、カンボジアの十才になる子を家で育てることになった。外からみると日本のことがよくわかる。自宅は千葉のベッドタウンにある。自分の子供に近所の主婦も関心を持ってくれて、子供を見ることによって一般の人がアジアに関心を持つということになったらしいと思う。

S・K——国際社会における役割ということだが、人間の開発は二つに分かれている。先進国では物質が多すぎ人間性が喪失。途上国では「もつと世界を見る、自分からやらなければ

ダメ」というと、「自分たちの生活さえままならないのに」という反論に何も言えない。どういうふうチェンジするかは先進国と途上国では違うと思う。

T・F——Kさんの問題は大きい。それは技術的問題。日本でもチェンジ、ガイダンスといった外来語をそのまま使用している。本当の意味での日本語に翻訳し、日本固有の歴史の中から理解をせねばならない。シンガポールならシンガポールという文化圏の中で翻訳をすればいい。未消化に使用することは技術的問題である。

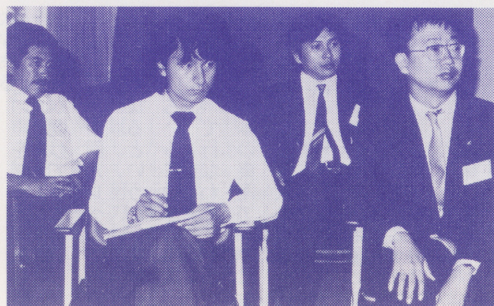
◇人間性はどこでも同じ

M・S——人間性は世界どこでも同じだと思う。セルフフィッシュ・アンセルフィッシュといった問題はどこでも同じ。MRAは個人もしくは国レベルでも無私(心)になるようなチェンジを常にしている。人のMRAのアプローチの仕方はいろいろある。社会意識、自分の考え、個人的問題等々、その時点から社会的良識を発展させることができる。先進国の途上国に対する態度にチェンジが必要。プ

ラント委員会報告は英国で卓根的支持を受けているが、普通の人々でも世論を作り上げていくという国際的役割がある。利己的でないかどうかが大切だ。

T・U——西側は自己中心的という悲観がある。現在オーストラリアでは失業率六割であり、それはインフレからである。インフレは賃上げの結果であり、強大な労組による。労組の主張は物価への波及効果を考えていない。根本は利己主義にある。その経済的発展が問題。

R・S——MRAについての本を読むと理論は少なく行動が多く先導してくれる。K・Kさんの話に感銘を受けた。国際化が進んでいる現代における経営理念は社会に対する貢献が必要。司会——行動に重点をおく。個と個の連帯、一人一人が国を超えた役割を行動として示すことが大切だ。こういう交流に意義がある。今後も協力しお互いの交流をもとう。





連載 ⑤

人と機構

◇私は彼らを許せない

世の中には、このような革命は起り得ないときめつける人もいる。「資本主義者が変えられるものなら海老が笛をふく」とフルシチョフはいった。反動的な人は全員一つの階級に属し、進歩的な人は皆別の階級に属するなどと考えるのは実に浅はかである。己れを優先させるか、それとも人のことを考えるのか、闘いの基本的な別れ目はすべての階級のすべての人の中に流れているのである。いづれの階級にも権力、財力、安逸、地位をあくことなく求める人もいるし、過ちを認めて新しく出直すことを辞さない人もいるのである。

国際情勢の危機が増大し、何千万の人びとが苦しむ可能性を

彼らは風を汚し鳥も木も殺してしまつた

私の喜びのすべてを

己れの富を守るために

天地をけがしている

現実の世界をみるとサリコスキーの嘆きは理解できる。だが彼の考え方は短絡すぎないだろう。風を汚し鳥を殺すのはすべて実業家だけのしわざだろうか。われわれの欲望はどうなのだろう。責任をある一つの階級にお

もつた今日、われわれは全ての階級の進歩的勢力の協力を求める機会を逸してはならない。われわれが固定した性格を特定の階級や特定の集団のもとの自動的にきめつけてしまうことは現実を見誤まることになる。

フィンランドの詩人ペンティ・サリコフスキーは「わたしは彼らを許せない」という詩の中で次のようにのべている。

彼らを許せない
知らずにやるならともかく、
知ってやっている連中

彼らの名は実業家
彼らが支払うより多くをわれわれはつねに支払わされている。

私は同じ貨幣で必ず返済してやる

のではなく制度を代表しているという意味で仮に反対するのだという人もいるが、制度と人を

区別することはたしかに大切である。正しくない制度は改めな

ければならないが、それを代表する人を個人攻撃することとは

違ふ。キリストは悪魔に対しては妥協することなく戦つたが、

人を差別することはなかった。

「わたしは善人でなく罪人を招

きよきたのです」といって時の

権力者ローマ人に協力する人た

ちと食事を共にした。キリスト

は左と右とか、人と人とを比較して良いとか悪いとか区別し

なかった。誰でも新しい人にな

れると信じていた。しかし往々

にして師の教えに従うどころか

弟子たちは力ある者より反逆者

を酷評したことを忘れてはなら

ない。(マルコ伝二章十七)

◇二つの資質

個人の心が変わること、そして

てそうした人を集めることは労働

組合、政党、その他の大組織を

通しての不断の闘いにとつてか

わるものではない。しかし一国

の政治や経済の責任ある立場に

ある人たちが、すべての人の尊

厳を尊重するようになれば、そ

の結果ははるかに有意義なものとなるであろう。

私のよく知っているドイツの

ある大きな石炭会社の社長の例

をとってみよう。彼と労働評議

会の議長とは戦時中から憎しみ

あつてしたが、少しでもこの関

係を改善しようと望んだ社長は

スイスで開かれていたMRAの

大会と一緒に出席しようと思

つた。議長はこれを断つたの

で社長は一人で出かけた。そ

で彼はかつてトラベル・メーカ

ーとして三人の従業員を解雇し

た理由が不正直であつたことに

気がついた。帰国してから彼は

労働評議会議長を招いて嘘をつ

いたことを謝り解雇した人達

を再就職させた。二人の間に信

頼関係が生まれ、そのことが他

の評議会の人びとも知らされ

た。その結果当時としては革命

的ともいえる労働評議会の共同

決定法にまで達したのである。

他の人がこうした心の変革を

見いだすのを助けるには二つの

資源が必要とされる。おもいや

りと展望である。変革に対する

抵抗はなかなか強いもので、ひ

とから変わることを求められる

や否や別の防御機構が活発にな

のに対し、おもいやりはしばしば人の心を開く。展望をもつことも同じ効果がある。つまり、その人が私とより良い世界を築こうとする私の役目を理解するとき、そこに希望が生まれる。その希望こそ変革への強力な推進者である。

利益を異にする同士が無慈悲な闘争に、思いやりだの展望だのの余地などない、と考える人もいる。軟弱さが入りこみ平和と調和といった名のもとにカーベットの下に社会悪の温床が入りこんでしまう、と考える。たしかに自分の既得権に対する攻撃をかわすために、理解とかチームワークといったアピールを利用する人がいる、というのは間違っていない。

◇本当の思いやり

しかし本当の思いやりとは堅固なものであってたやすくごまかされることはない。人を思いやるならば、小さな自分本位の目的のないからにとられた人をおおっておくわけにはいかない。同様に自分の権利や尊厳が犯されている人たちを見捨てることもできない。そして人をくじけさせたり、人の成長や幸せの可

能性をつむ機構や構造に敢然ととりくむことになる。

情熱をもった人は社会に強い影響を与える。おもいやりは情熱の源であり、うらみよりも変革への可能性をもっている。しかし思いやりは、うらみや憎しみの特長である決定力に欠ける。

おもいやりに基いた社会闘争は、真によりよい世界をのぞむ人の連帯を促進する。おもいやりは全ての階級、人種、国籍の人々に道をひらく新しい人民戦線をつくる。思いやりそのものが、あらゆるレベルの変革の過程をすすめる新しい秩序の胎児である。——良心の育成に、より良い機構の形成に、偏見や差別を打ち破る上に、そして国際社会の連帯をすすめる上にも。

マルクスは階級のない社会が歴史の目標であると考えた。彼はプロレタリア独裁のもと一定の教育期間をおいたのちそうした社会が生まれると信じた。しかし、たとえ独裁が多数を代表するものとしても、真の平等のための前提条件である新しい態度の形成に果してつながつていくのだろうか。「従属するよりは協調を、命令するよりはめざめること」が我々の時代の深い

必要をみたとすべき人間関係であるとガラウディは書いている。

「一九四五年にすら、ただ一つの党、あるいは階級が国の問題を解決できるなどとは思わなかった。」とイタリア共産党指導者エンリコ・ベルリンゲルは言う。

韓国MRAの招待で訪韓、広がる交流の輪



▶韓国シンガアウトの唄とおどり

出来事

韓国MRA代表、鄭先生のお招きで英国のジェームス・フオリバン氏及びジェフリー・クレイグ氏と共に去る六月二十一日より二十四日まで訪韓しました。一九八六年のアジア大会として八八年のオリンピック開催を控え、地下鉄工事を初めとする建設の槌音も高く、ソウル市街の発展ぶりが大変印象的でした。また、板門店を訪れる機会を与えられました。その緊迫した空気に触れて考えさせられることも多くありました。

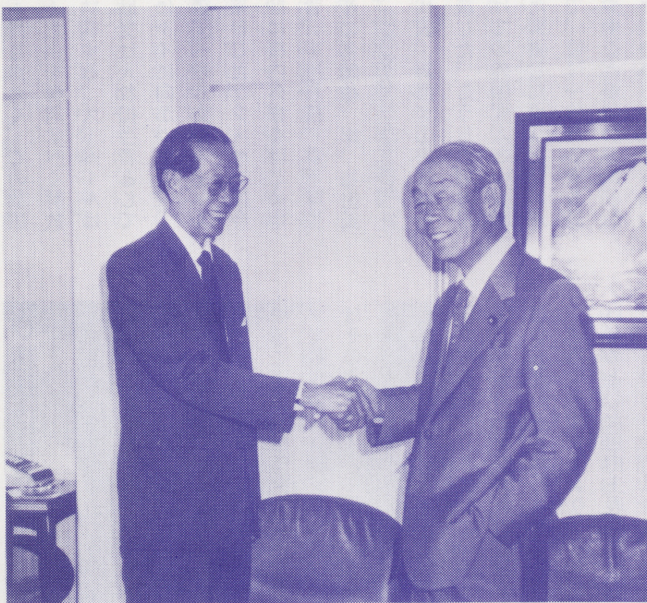
韓国のMRAチームの皆さんの中には日本やスイスでお会った旧知の方も多く、本当に暖かく歓迎して頂きました。また、政財界の重鎮とも言うべき方々、そして将来の韓国を担うであら

Jens-J. Wilhelmsen
Man and structures

原語版 (英語)
Man and Structures
(人と機構)
発売中
定価 550円

う若い高校生の人達にもMRAのお話をする機会を作って頂きました。韓国では、MRA精神を殊に若い人達に伝えたいと沢山の学校にその活動の拠点を設けています。「これからは日本と中華民国の青年達とより交流を深めるべく、出来れば今年十月頃にソウルでMRA青年大会を開きたい」という鄭先生の計画に是非協力したいと思えます。

日本から一番近い隣国でありながら、私達の韓国に対する理解と関心は甚だ心許無いものです。過去の歴史の教訓を学びつつ、新しい世代とのより良い関係を打ち立てていくための一助となりたいとその決意を新たにさせられました。(長野)



仏教とカンボジア固有の価値観に根ざした国家再建を目差して

五月晴れてまぶしいような五月二十三日の日曜日、田端のMRAハウスに二人のカンボジア人訪問客があった。上品な物腰しの老紳士は慣れた手つきで箸を口に運んだ。「カボチャ」や「うどん」という日本語の由来がカンボジアであるということ、好々爺のように楽しそうに私達に語った。この人こそクメール人民民族解放戦線(KPNLF)の議長ソン・サン氏である。六十年代後半にカンボジアの首相を務めた人で、六月にマレーシアで調印された反ベトナム三派連合の民主カンボジアでの首相に決まっている人である。

◇コーベの死

もう一人はスオン・カセット女史。かつてはシアヌーク殿下の秘書を務めた才女だが、林野庁長官を務めた夫はクメール・ルージュ(ボル・ポト派)に殺されている。三人の子供をフランスに残してソン・サンの元で祖国解放闘争に献身する彼女にシンガポールのジャーナリストは「ドラゴン・レディ(龍の女)」という異名を与えている。多くの不幸をくぐりながらも底抜けに明るい彼女は二回の訪日の中に多くの友人を作っている。

ソン・サンの長男は「コーベ」と呼ばれた。彼が初めて訪日中の一九四一年に初子誕生の報を神戸で聞いたことからこう命名された。戦後彼はカンボジア国立銀行を創設、自ら総裁を十年余務める。当時珍しい金量経済学を既に用いた彼の経済政策は効果を上げ、特にそのインフレ対策は絶妙であった。十年間理容料金がほとんど据え置きだったことは今でも語り草である。そうした経済運営の手腕を買ってシアヌークはソン・サンに大蔵大臣兼任を要請する。利害の対立する大蔵大臣と中央銀行の

総裁を同一人物が兼務することは国益にそぐわない、と彼は辞退する。やがて首相に就任したソン・サンは汚職追放策等を推進しようとするが、シアヌークはこれにも耳を傾けず、独善的な言動に一層拍車がかかる。一九六八年、コーベは交通事故で死亡する。敬虔な仏教徒の首相ソン・サンはこれを神が「俗界」から退き「仏界」へと入るべき微候として、首相を辞任してパリに居を構える。

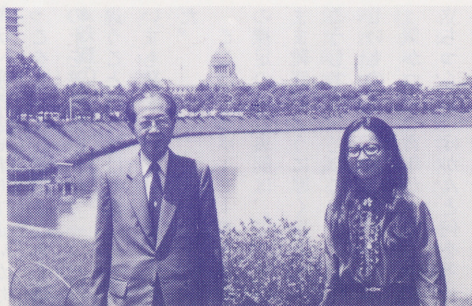
次男スーベールはソルボンヌ大学で考古学を学ぶ。インドの血もひく母親のすすめもあり、彼はインドのラジモハン・ガンデーを訪ねる。インドシナの悲劇を書いた彼の詩「アブサラの微笑み」は、MRAの親善使節「ソング・オブ・アジア」の主要なテーマでもあった。彼がラジモハン他との交流をもったパンチガニー(MRAアジアセンター)の劇場は世界各国有志が椅子を買う形での寄附で建設されたが、ソン・サン家もその一席を買い取った。

◇解放戦線結成

カンボジアはクメール・ルージュ(ボル・ポト派)の手によ

▲福田元首相を訪問

▲皇居を見学する
ソンサン首相とスオン・カセット女史



り二百万人にのぼるともいわれる大虐殺が行われた。ナチスによるユダヤ人虐殺などと異り同民族同士による虐殺としては史上最も残酷なものである。一九七九年ベトナム軍がカンボジアに侵入し、クメール・ルージュはタイ・カンボジア国境に追いやられた。シアヌークもクメール・ルージュからの幽閉から逃れ北京に向かう。ソン・サンはカンボジア領内にとどまる民族主義者と国外在留の指導者各層

の懇望も辞しがたく、この故国の独立と自由を奪還すべく解放戦線を結成する。スーベールは人道援助受け入れ担当者として父と共にタイに向かった。

欧米諸国への外交キャンペーンを経て来日したソン・サンは今回六日間に桜内外相をはじめ中曾根行管、中川科技、森下厚生、安倍通産の各閣僚。岸、福田両元首相、民社党春日元委員長、社民連田代表、新自ク山口幹事長等と懇談した。こうした国の将来を賭けての外国要人との会談といった緊張したやりとりの連続の中で、彼は一時たりとも笑顔を絶やすことがなかった。周囲の人々にいつも心を配り優しく接するその物腰の中に、仏教徒としての深い信仰に裏うちされた強い信念が感じられた。ソン・サンは毎朝瞑想の時間を持ち、日に何回か祈りの時間を欠かさない。仏教とカンボジア固有の価値観に根ざした国家再建を目差している。汚職と社会不正が共産主義の温床となつて今日の悲劇の元凶となつたことを思い起こすとき、個々人のモラルの復活と人間改革こそがこれからの国造りの基本にならなければ、と考える。

◇趣味は仏典

MRAハウスへの道のり、私はこの二人のカンボジアの友人を皇居の中に誘った。ツツジの美しさと共に二人は石垣の作りがアンコールワットに類似していることに感激した。東南アジアで最古の統一国家カンボジアはその文化の高い完璧性とスケールの大きさと世界に影響を与えた。文化の類似性をもつた両国が道義を仲立ちにして自由と人の尊厳の回復をめざす連帯を組む必要を感じた。

連合政府独立により、日本をはじめとした自由主義諸国からの人道援助の受け皿が確立した。スーベールの手による物資を多くの人が心待ちにしていることだろう。

この日のソン・サンは島田夫妻から日本料理や五月人形の説明を聞き、クレイグ夫妻のスコットランドの事情に耳を傾けながら孫をもつ老人としてのんびりとした一日を楽しんだ。趣味は何か、との質問に仏典を語ることで答えた。一日も早く平和なカンボジアでそれが出来ることを念じてやまない。

(藤田幸久記)

インドのにおい 1 神々の国で考えたこと



大 沢 正 行

◇インドのにおい

ボンベイ空港を出たのは、十月十二日の朝六時をすこしまわった頃だった。空港の出口は、裸足の少年やタクシーの運転手たちでごったがえしていた。みな私の荷物をねらって押し寄せてきた。その人ごみの中を、周りのインド人たちよりひととき背の高いメガネの青年が、分け入るようにして私に近づいてきた。『ミスターオオサワ?』と問いかげながら、手の中の小さな私の写真を見せた。

私はほっとして、『イエス・マイネーム・イズ・オオサワ』と応えたのだ。『はじめまして、ようこそインドへ』。青年は握手を求め、私にしつこくまとわりつく少年たちを追い払いながら、二十キロ以上ある私の旅行カバンを楽々と持ち上げ歩きはじめた。

その先には、イギリスの戦争映画によく出てくるような車が一台止めてあった。

ムツとするような熱気に、何とも形容しがたいにおいが加わって、まだ半分寝ぼけている頭の中で、これは大変な国へ来たものだと思った。どう表現した

らいいのだろう。このにおいを文字であらわすのはむずかしい。人間が土にまみれる時に生じるにおいでもいおうか。

土のにおいと人間の排泄物のにおいが入りまじつたようなにおいに食物のすえたにおいが加わり、それが湿気を含んだ暑さの中で発酵した感じである。

しかし、私はその強烈なおいに嫌悪感はない。

そういえば昔、私が育った村にも同じようなにおいが漂っていた。肥溜のまわりで追いかけてををし、たい肥のまかれた畑の上を逃げまわった。一つだけ違うことは、私は昔も、そしていまも靴をはいていることだけだ。

ここにいるポーターや少年達の裸足の足の裏側は、皮がそのまま靴底のように厚く見えた。こうしてインドのにおいは懐かしいものとして私に定着した。気がつくやうに青年が、その場に立ちつくし、ぼかんと何を考えたらしいのやら分らなくなった。私を手まねきしている。私はその時、まさしく夢の中の国に来たような思いで歩きはじめたのだ。

◇アンバサダー

日本人が特別めずらしいわけでもあるまいに、四・五人の子供達が国々に何か言いながらついてくる。「バクシー、バクシー」。

私のガイドブックによると、乞食が人に金を請うときに発することばだそうだ。一人にやるとみんな寄ってきて、しつこく金をせびるので絶対にやらない方がよいという。彼らの顔に暗さはなかった。きらきらと輝くきれいな眼をみんな持っていた。私には彼らに金をやる余裕はない。しかし、その声の真に迫ってはいるが妙に明るくひびくことばを無視することはできなかった。

それは多分そのことばが私が始めて覚えたヒンディ語だったからだと思う。青年は私の旅行カバンを車のトランクに乗せ、運転席に座わり私を待っていた。

私は彼の名を聞いた。「ディビット・デビダーです」。すぐには全部覚えられそうにないので、ディビットだけを頭の中めぐり返す。

「この車はインド製ですか

？」「ええ」。

彼によると、車の名は「アンバサダー」一九五四年にイギリスからその製造行程のすべてをインドに寄付された車だそうである。文字どおり「外交官」として役割を一九八一年に至るまで務めているわけである。てんとう虫型のアンバサダーは、二種類しかないインド製の乗用車の一台として全インドを雄々と走っていた。

「飛行機の旅はどうでしたか。」「快適でした」。

ディビットが聞いてくることに全神経をかたむけ、しどろもどろに答える。

「私は、はじめて飛行機に乗りました。意外と恐くありません



んでした」。彼は笑って軽くうなずき何か言う。残念ながら私には聞きとれない。「ごめんなさい、私にはあなたの言っていることがわかりません」。彼はまたうなずきながら幾分ゆっくりと話す。「疲れたでしょう」。

「ああ、ええ、しかし興奮していません」。彼が満足そうにうなずいてくれたことにほっとした。

◇クマラムに着く

私は外に目を向けた。片側三車線の立派な道路である。遠くに工業地帯らしきものも見える。まだ朝の七時ちかくだというのに、煙突がかげろうのようにゆれていた。

道路は草原の中を走っている。黄色く枯れた草がずっと続いている。しばらく行くと、遠くに何人もの人間が道路の端にしゃがんでいるのが見えた。その後ろには、泥でつくられた小さな家が長屋つづきで並んでいた。

車を見るのがめずらしいとも思えない。一体何をしているのかわからない。貧民街であるとは察しはつくのだが。近くを通る時によく見ると、家々のそばにもしゃがんでいる人がかなりいる。彼らは朝の排便をしている

る最中だったのである。

車の窓からは、空港を出たときのおいがようしゃなくはいってくる。しかし、私は窓を閉めようという気にはならなかった。私を迎えたインドのにおいである。

「彼らは貧民だよ、よくない」。ディビットはつぶやいた。

車は、工場地帯を抜け、街の中へはいってきた。ほりりだけですんだ建物ばかりである。道路には牛がいる。サリーを着た女性が歩いている。男たちが車が来るのもかまわず道路を横切る。四つ角に信号機がないのが目立つ。道路標識が見あたらない。そんな中を、まるで群をなす魚が回遊しているように車が走っている。何もかもがイン

ド的であると思われた。クオリティーアイスクリームと書いてある看板を指差しながらディビットが「もしアイスクリームを食べたらあの会社のだけ食べられます」と教えてくれた。「日本ではどんなアイスクリームが有名ですか？」。

「たくさんあります」。言い終えてはっとした。これからはアイスクリームに至るまで気をつけなければならないのだろうか

と。

空港より約一時間半、車は海外沿いのMRAハウス・クマラムに到着した。

道路をへだててアラビア海が一望できる。周辺にも立派なマンションが建ち並び、その地区はウィーナスパートメントと呼ばれている。その名のとうり風光明媚な所である。

つづく

▲鉄道の一コマ

◀ガンジス川で体を洗う人々



◇労働組合を訪ねて

メルボルンのMRAセンター「アーマ」で、今年の一月三十一日から始まったスタディーコースも、今年で既に八回目を数えます。

コースは三カ月ですが、初の試みとして、四週間の短期集中コースも併設され、学生や社会人が参加してきました。エジプトの女医。最近まで教職にあっただというニュージーランドのカトリックのシスター（最年長六十四才）。

ラオスの難民でオーストラリアに帰化したばかりの方等々、参加者は九カ国からの二十二人のほりました。短期コースを受けた私達八人は、二つのグループに分かれて一つは「労働組合」について、他のグループはオーストラリアの原住民「アボリジニー」問題について、学ぶことになりました。

一見平和に見えるオーストラリアに存在する数限りないストライキは、深刻な問題の一つです。「労働組合」グループにまわされた私は、他の人達とまず、

メルボルン港にあるうちで最大で、しかも問題は最も少ないという組合の役員であるアーチャー・アーチェリー氏にお会いしました。「労働組合は、大きな影響力を持つ」。こんなべく然とした印象以外、組合活動というものに対して、なんの予備知識もない私でした。ですから「階級闘争」などという言葉から受ける印象のために、すっかり緊張してしまい、祈るような気持ちで氏の待つ港へと向かいました。

ですから「いかめしい顔つきの大男にちがいない」という私の勝手な想像とは裏腹な、小柄で優しさの中にも鋭く光る目を持った、イタリヤ系のほらかな方が私達を迎えて下さった時は、ひと安心したのでした。氏は、多忙で、かつ収入の低い組合幹部の仕事をあえて引き受けた動機を二つ話してくれました。「私は以前、よく積荷の一部をかすめたり、あばれ回って台無しにするかなりの無法者だったんだが、五年前に信仰を持つようになってから、人生観

と価値観がすっかり変わったんだよ。そして、騒動続きで荒れていた組合に対して、批判ばかりするのを止めて、実際に何とかしなければと決心したんだ。」

安易に過ごせる日はなく、毎日何かしらの困難な問題に対し、全面的に責任をもって判断を下さなければならぬというこの仕事に関しては、「はたから見ると難しくはないんだよ。大切なのは『誰が正しいのかではなく、いったい何が正しいのか』ということだけなんだからね。どんなに脅かされても怯えはしない——為し遂げられるべき正しいことを見極めて実行するのみ。」とも言われました。勤務中に、対立した相手から頭を椅子で殴りつけられたこともあるとのことです。

「いちばんたやすいのは「さあ、もう仕事はやめよう。ストライキだ」と叫ぶこと。そして最も難しいのは「さあ、みんな仕事に戻るんだ」の一言だとも教えてくれました。

二時間ほどの見学の途中、何人も、誰が正しいのかではなく、何が正しいのかだ」と言われました。アーチェリー氏の活動範囲は自分の仕事のみにとどまらず、恵まれぬ人々にも向けられています。障害を持つ方々の港見学を実現するために、仲間を声をかけて寄付を募ることもあそうです。また自分自身を含めて港湾労働者が発展途上国のために果たせる役割りについては真剣に考えているようです。

私は氏の人格と信念、それに勇気にすっかり感動し、来た時とは逆ですがすがしい気分です。帰途についたのです。

次に私達は、ある製造所を訪れました。耳をつんざかんばかりの騒音と強烈なおい。その上、砂ぼこりと火花の飛びちる中での仕事は大変でしょうが、全体の印象はこぎれいで明るく、一人として不満気に働いているような人を見なかったのは、私にとって驚きでした。

工場内見学の後でスライドを見せてもらって初めて、これがMRAを知った人が25年かけて労働条件の改善や経営者側と組合間の円滑な関係実現のために努力された結果であることを知りました。

この会社のモットーは「優秀さ」「思いやり」「分ちあいの精神」の3つだそうです。ここにはスポーツセンターや

ず、恵まれぬ人々にも向けられています。障害を持つ方々の港見学を実現するために、仲間を声をかけて寄付を募ることもあそうです。また自分自身を含めて港湾労働者が発展途上国のために果たせる役割りについては真剣に考えているようです。

私は氏の人格と信念、それに勇気にすっかり感動し、来た時とは逆ですがすがしい気分です。帰途についたのです。

次に私達は、ある製造所を訪れました。耳をつんざかんばかりの騒音と強烈なおい。その上、砂ぼこりと火花の飛びちる中での仕事は大変でしょうが、全体の印象はこぎれいで明るく、一人として不満気に働いているような人を見なかったのは、私にとって驚きでした。

工場内見学の後でスライドを見せてもらって初めて、これがMRAを知った人が25年かけて労働条件の改善や経営者側と組合間の円滑な関係実現のために努力された結果であることを知りました。

この会社のモットーは「優秀さ」「思いやり」「分ちあいの精神」の3つだそうです。ここにはスポーツセンターや

バーベキューのための施設も完備しています。また、心理学者やカウンセラーを雇って、社員健康、金銭、結婚、家庭問題等の相談もするそうです。その結果、社員側もそれに応えて一杯働きはじめ、事故やストの件数も減り、生産高も目に見えて上がってきたとのこと。

そしてこの小さな製造所が、25年間にわたり利益の10%を社会事業のために寄付してきたということを知りました。

私は日本人として今こそ、外にそして世界に目を向けるべきだと思いました。たまたま豊かな国に生まれ育った私は幸運でした。

しかし、今アジアの中で西洋諸国同様に富んでいるのは日本だけだと知りませんでした。それどころか、この地球上では、毎年一五〇〇万人の子供達が飢えのために死に瀕するという深刻な状況が存在することに気がつきました。何かが今なされなければと感じます。

戦後の荒廃から見事に立ち直った日本人のエネルギーが、今日本のためのみならず世界の人々のために求められていると思います。

戦後の荒廃から見事に立ち直った日本人のエネルギーが、今日本のためのみならず世界の人々のために求められていると思います。